Giving Tree
74ごう 2026.10がつ
MIMAMORU HOIKU

エスノグラフィ

新宿せいが子ども園
園長　藤森　平司

著名な教育研究者にジョセフ・トービンという人がいます。彼は、幼児教育、比較教育、文化人類学、質的調査法の分野で著名な教育研究者です。彼は、幼児教育の質を向上させるための研究を行い、特に日本の幼稚園・保育所における教育の文化や実践についてのエスノグラフィ的研究を行っています。エスノグラフィという言葉はあまり聞きなれていませんが、文化人類学で主な手法として用いられてきたものだそうです。エスノグラフィは、エスノグラファと呼ばれる文化的外部者が、ある場所に滞在し、そこの文化的内部者と生活を共にし、話を聞くという一連の過程を通して、その場所に住む人々特有の社会・集団様式・振る舞い・思考を調査し、記録する行為やその調査書を指します。その際、文化的外部者の概念や言葉で現象を説明するのではなく、文化的内部者の概念や言葉に着目して体系的かつ組織的に書き記していくのが最たる特徴であると言われています。文化人類学は、フィールドワークに基づいたエスノグラフィを通して、文化の多様性を研究し、特定の文化・社会・共同体の詳細な報告を提供してきたと言います。

この言葉とその手法はいかにも研究者としての説明ですが、私はそのようなことは常々考えていることに近いものがあります。それは、保育を考えるうえで、「そのエビデンスは？」と問うたときに、どのような環境が、その子にどのような影響を与え、それがどのような発達に影響していくのかを考えるとした研究は、限界があると思っています。なぜかというと、保育を見ていると、それが特定できない場面が多いからです。それは、特に子ども集団での育ちに関してです。子ども集団の中では、どの子が、どのような部分で影響をしているのかが特定できないからです。ですから、その時のエビデンスは、臨床研究で、目の前の子どもの姿から判断していくしかないと思っているのです。すると、保育を心理学からだけではなく、文化人類学から考えていくべきでしょう。エスノグラフィを通しての研究に、「特定の文化・社会・共同体」があることは、保育を個人の発達としてとらえるだけではなく、文化・社会・共同体のありかたとしての研究も必要な気がしています。

トービンは、伝統的な文化人類学的興味の流れを受け継ぎながら、エスノグラファとして、幼児教育現場をフィールドとし、カリキュラムや日々の保育内容・実践についてのみならず、「文化」に根付く教育、教育の中に隠れている「文化」に迫った本を出版しています。

その本は、２０１５年にシカゴ大学出版局から出版した Teaching Embodied :Cultural Practice in Japanese Preschools をもとに、日本の読者に向けて林　安希子氏と共同研究した成果を執筆したものです。タイトルは、「幼児教育のエスノグラフィ」でサブタイトルが「日本文化・社会のなかで育ちゆく子どもたち」（明石書店）です。

第1章が「見守る」で、それを「見ることと待つことの論理」と説明しています。そこには、「見守る」に二つの意味を持つとあります。一つ目は、誰かが誰かを傷つけることから守るために注意深く見ていること。二つ目は、誰かの行動を観察すること。例えば、「見守る」は「子どもの成長を見守る」「成り行きを見守る」といった言い回しで使われます。日本の幼児教育者が使う「見守る」に関連した用語に、「待ちの保育」があると言います。「待ちの保育」は「待つ」「忍耐」「長い目で見る」を含めた「行動する」ことより「見る」ということを基盤とした教授法と言えるとしています。トービンは、感情・社会性・知的能力の発達の機会を子どもに与えるということを含めた、様々な教授法と発達目標について、現場において幼児教育者の説明の中に、この「見ること」と「間を取ること」の戦略を見ることができると言います。

ここに、日本的な保育感が表れていると見ます。保育者の言葉に、「私たちは子どもたちの感情発達を助けることが大事だと思っています。そのためには、子どもたちは自分たちで葛藤する時間が必要です。だから、私たちは見守るのです」と言ったそうです。

彼は、次に「守ること」について考察します。例えば、学校の門に立つ守衛は、何かことが起きた時に対処するだけでなく、そこに立っていることで人々に誰かが守っていることを知らせ、その役割を果たしています。園でも、保育者が見ていることを子どもたちに知らせることで、子どもたちに自分自身で物事を解決しようとする挑戦する自信と安心を与えます。保育者はある種の安全網を提供し、子どもの社会的関りを支援するというのです。日本の保育者のインタビューの中で、「子どもたちは先生に見守られていると知る必要がある」「見守ることは子どもたちに自信を与える」というように、「見守る」と「見守られている」という言葉をよく使ったそうです。これらのコメントからトービンは、「見守る」と日本の伝統的な概念である「世間の目」との関連を示唆していると考えています。世間の目は「社会の目」とも言えます。「世間の目」は、うるさいご近所に囲まれているというような否定的な意味を持つこともありますが、通常、特に子どもの面倒を見るという場面では、社会に対する配慮として肯定的な役割を示すように使われると言います。

トービンは、このような日本の伝統的な「子どもたちが見守られている」という経験をする主な場所が、現代日本では、幼児教育施設ではないかと考えています。

GT information

「藤森メソッド全国実践研究大会 in 福岡」

公式 LINE でもお知らせしておりますが、2027 年 1 月 15 日（金）～17 日（日）に開催いたします。現在、申し込みの準備を進めており、11 月上旬には受付を開始できる予定ですので、今しばらくお待ちください。今回は、金曜日の公開保育からスタートする日程となっており、普段の保育の様子をじっくり見学できる大変貴重な機会です。見学先も多くの施設にご協力いただいております。同じ規模の施設や、似たような環境の施設など、それぞれの園から参考になることがたくさん見つかると思います。ぜひ、園長先生や主任の先生だけでなく、現場の先生方にもご参加いただきたいと思います。きっと、これからの保育につながるヒントがたくさん見つかる研修になるはずです。

Giving Tree Report

全国のGT園の先生方に、実践を報告してもらう場です！

「仲間とともに学び、子どもから気づく。私たちの保育の歩み」

埼玉県ふじみ野市にあります、鶴ケ岡すまいる保育園の渡邉です。私が「見守る保育」と出会ったのは、現在の社会福祉法人あゆみの会に入職してからです。あれから15年が経ちました。

それまでの私は、「子どもの最善の利益」や「子ども主体」について深く考えるというよりも、園で実践してきた保育を受け継ぎ、先輩から後輩へ伝えていくことを中心に考えていたように思います。

しかし、「見守る保育」と出会い、少しずつ保育が変わっていきました。遊びのゾーンを整え、子どもたちが自分で遊びを選択できる環境をつくる。そして、大人の指示通りに動くのではなく、子ども自身が考え、自ら行動できる保育を目指すようになりました。

もちろん、最初から何をすればよいのか分かっていたわけではありません。近隣のGT加盟園に職員の保育実習を受け入れていただき、環境構成や保育者のかかわり、子どもたちの姿から多くのことを学びました。受け入れてくださった皆様には、改めて感謝申し上げます。

こうした経験を通して、GTには、互いの保育を見合い、一緒に考え、学び合える「仲間」がいることの強みがあると感じています。自園だけでは得られない視点や気づきを他園の実践から学び、研修や全国大会を通して、全国の保育園や保育者とつながり、互いの実践や思いを共有できることもGTの魅力です。

昨年度からはGT埼玉でも公開保育を行い、当園でも公開保育と実践発表の機会をいただきました。他園の先生方からいただいた気づきを通して、自分たちの保育を客観的に振り返ることができました。

さらに、第8回藤森メソッド全国実践研究大会では、子どもの「つぶやき」を手がかりに、そこから保育を広げていく実践発表をしました。つぶやきに注目すると、これまで見逃していた小さな気づきや「おもしろい」という心の動き、ヒトやモノとのかかわりの中で揺れ動く姿が見えるようになりました。

現在では、藤森メソッドの考え方をベースに、あゆみの会独自の「法人クレド」を掲げています。その一つが、「時間と空間の制限を緩やかにします」という言葉です。食べる時間や遊ぶ場所を子ども自身が選ぶなど、自分で考え、選択できる環境を大切にしてきました。

大人が「こうなってほしい」と先回りして考えるのではなく、「今、この子は何を感じているのだろう」「何をやってみたいと思っているのだろう」と立ち止まる。子どもの姿をよく見ながら、子どもと一緒に「おもしろい」を見つけていく。そうした積み重ねが、少しずつ私たち自身の保育を形づくっているのだと感じています。

「真似る＝学ぶ」と言われますが、それは私たち保育者も同じです。多くの方から学び、真似ることから始まった保育が、少しずつ私たちの保育へと変わってきました。これからも全国の仲間とつながり、ともに学び、考え、試行錯誤を重ねながら、子どもたちの「やってみたい」や「好き」を大切にする保育をつくっていきたいと思います。

埼玉　鶴ヶ丘すまいる保育園
園長　渡邉　満夫

「ともに育ち　共に生きる人」

まさか私にこのような機会が巡ってくるとは思っておらず、大変驚いております。恐縮ではございますが、私が書けるとしたら、第二いちご保育園で園長になってからの4年間と、今感じていることくらいかと思います。等身大の言葉で書いてみますので、少しお付き合いいただけたら幸いです。

園長になった当初は、とにかく必死でした。「自分に何ができるのだろう」「これまで園を支えてきた職員と一緒に進んでいけるだろうか」。そんなプレッシャーや迷いを抱えながら、ただただがむしゃらだったように思います。「園長は孤独な仕事」と言われます。初年度は「本当にそうだな」と感じることもありました。しかし、地域の園長先生方やGTの研修で出会う皆さん、そして職員と保育の話をしていると、不思議と心がふわっと軽くなりました。振り返れば、たくさんの人に支えてもらっていたのだと思います。

2年目を迎える頃、「この園が大切にしたいこどもの姿を言葉にしてみよう」と考えました。そこで生まれたのが、「ともに育ち　共に生きる人」という言葉です。藤森先生の講義や研修、他園への見学を通して育ってきた保育への想いを、職員と一緒に言葉にしました。その頃から園では「オープンデイ」という取り組みも行っています。こどもたちが園内のどこで遊ぶかを自分で選ぶ活動です。「毎日オープンデイでもいいのでは？」「同じ場所に集中したら大変？」職員からはさまざまな意見が出ます。オープンデイに限らず、すぐに正解を決めず、こどもの姿を見ながら、やってみて、振り返り、また話し合う。そのたびに「こどもにとってどうか」に立ち返る。この積み重ねが、今の第二いちご保育園の保育をつくっているのだと思います。

園長になって、「チーム」についても改めて考えました。職員それぞれの視点が重なることで、見えてくるものがあります。そしてチームで保育を考える中で、私自身の視点も少しずつ広がっていきました。今では、チームは園の中だけではないと感じています。こどもを中心に考えれば、保護者も地域の方々も、みんなこどもの育ちを支える仲間です。自治会や商店会に関わり、地域の昔の姿や、ここで暮らしてきた方々の話を聞く。それは私たちにとってかけがえのない財産です。今年は地域のお祭りへの出店や、自治会との共催も実現しました。一緒に地域へ出る職員、その間園を支える職員、そして園を受け入れてくれる地域の方々。立場や役割は違っても、みんなでこどもの育ちを支えている。地域全体も一つのチームなのだと思っています。

そして最近、「ともに育ち　共に生きる人」という言葉は、こどもたちだけに向けたものではなかったのだと気づきました。こどもも、職員も、保護者も、地域の方々も、そして私自身も。人と人がつながり、お互いから学びながら、この地域で一緒に育っていく。こどもにとっては、ここが「地元」です。第二いちご保育園も、私も、まだまだ育っている途中です。これからも「こどもにとってどうか」をみんなで考え続けられる園でありたいと思っています。

園長4年目。第二いちご保育園も、私も、まだまだ育ってます。

東京　第二いちご保育園
園長　岩井英之

【編集後記】

私自身、「エスノグラフィ」という言葉を初めて聞きましたが、今回の内容を読んで、私たちが実践している「見守る保育」は、まさに毎日がエスノグラフィなのではないかと感じました。

日々、子どもたちの姿を観察し、発達やクラスの状況に合わせて環境や関わり方を変えていく。そして、その結果、子どもたちの姿がどのように変化したのかを職員同士で話し合い、検証する。うまくいかなければ、また見直していく。この繰り返しを大切にすることが保育なのだと思います。

子ども一人ひとりが違うように、年によってクラスの姿も異なります。それに合わせて環境や関わり方を柔軟に変化させていくことが重要です。

新宿せいが子ども園も今年で20年目を迎え、私自身も20年目になりました。振り返ってみても全く同じ一年というものはなく、毎年違った子どもたちの姿や思い出があります。

保育・教育の目的は、みんなを同じような人材に育てることではなく、子ども一人ひとりの可能性を最大限に引き出し、それぞれの力を伸ばしていくことです。今回、藤森先生の広報紙を読んで、改めて私たち保育者の役割と、日々の保育の大切さを再認識しました。

（新宿せいが子ども園　山下祐）

株式会社保育環境研究所ギビングツリー
東京都新宿区下落合２－１０－２０　　Tel 070-9400-3997　FAX 03-3954-4192